

述語によって要求されるノコト名詞句の意味範囲

— 述語の要求する補文との比較を通して —

金 英 周

(2009年10月6日受理)

Semantic Coverage of the “~NO KOTO” Noun Phrases Required by Predicates
— Through a comparison with complements clauses required by predicates —

Youngju Kim

Abstract: In Japanese a set of predicates require insertion of “~NO KOTO” to the nouns that appear in their complement position. In this paper, we examined the semantic contents of such obligatory “~NO KOTO” noun phrases through a comparison with the complement clauses that show the same distribution pattern, that is, “~KOTO” clauses, “~KA/~KADOUKA” clauses, and “~YOONI” clauses. Comparisons with these corresponding complement clauses revealed that the semantic coverage of “~NO KOTO” NPs includes not only a set of event/situation related to the preceding noun but also a variety of modality such as “establishment/non-establishment of facts” or “determination/non-determination of truth value”.

Key words: ‘~NO KOTO’ NPs, complement clause, modality

キーワード：ノコト名詞句，補文，モダリティ

1. はじめに

日本語では述語のタイプに応じて、(1a) のように補語の位置に裸の名詞だけを単独で使える場合もあれば、(1b) のように裸の名詞だけでは不自然に感じられる場合もある。そしてこの後者のような場合、(1c) のように「~のこと」という表現を付け足すことで自然な文として成り立つ¹⁾。以下、本考察では(1c) のような名詞句をノコト名詞句と呼ぶことにする。

- (1) a. サミットでは先進国の首脳たちがエネルギー問題を議論した。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：大浜のい子（主任指導教員），多和田眞一郎，町博光，白川博之，酒井弘

- b. ??原子力発電所を議論した。
c. 原子力発電所のことを議論した。

この現象について、寺村（1968）は、「~を考える」のような認識・思考を表す動詞の補語になるためには、名詞がなんらかのコトを表すような性質（コト性）を持つ必要があると述べた上で、コト性を持たない名詞（例えば「人」「机」「駅」等）が上記の枠（「~を考える」の「~」の位置）で使用される時、「~のこと」という語句を補わなければならないと述べている。すなわち、「エネルギー問題」のような名詞はコト性名詞であるため「~のこと」を補う必要がないが、「原子力発電所」のような名詞はコト性を持たないため、その名詞に「~のこと」を補わなければならないということである。この際、ノコト名詞句の表すコト性とは、名詞に関連するなんらかの出来事を表現するものであると考えられる。したがって、ノコト名詞句は適

切な文脈で使用されれば、出来事を表す「～する／したこと」節（以下、「～こと」節と呼ぶ）と同等な意味を表すことができる。

- (2) a. 首脳たちは原子力発電所のことを議論した。
b. 首脳たちは原子力発電所を建設することを議論した。

例えば (2a) の「原子力発電所のこと」は、「議題の一つは、エネルギー問題解決のために、原子力発電所を建設することだった」と言う文脈があれば、(2b) の「原子力発電所を建設すること」という「～こと」節の代わりに使用することができる。このことから、ノコト名詞句は全体として「～こと」節に相当する意味内容を表すとみなすことができよう。このような説明は、名詞句に付加されるのも、補文を導くのも、同じ「こと」という形式であることから、直感的に妥当であるように思われる。

しかし、「～のこと」が義務的に要求される場合のすべてが「～こと」節との関係から説明される訳ではない。以下の例を参照されたい。

- (3) a. ?? 期末試験を尋ねた。
b. 期末試験のことを尋ねた。
(4) a. ?? 会議を頼んだ。
b. 会議のことを頼んだ。

(3) (4) の例の場合も、コト性を持たない名詞に「～のこと」を補わなければならない点で、一見 (1) と同様なタイプのものであるが、これらの例は (1) とは重要な点で相違が見られる。

- (5) ?? 期末試験を受けることを尋ねた。
(6) ?? 会議を開催することを頼んだ。

(1) のノコト名詞句は、(2b) に示したように「～こと」節で置き換えることができるが、(3) (4) のノコト名詞句は (5) (6) に示されているように「～こと」節と置き換えると不自然になる。このことから(3)や(4)のノコト名詞句と(1)のノコト名詞句の意味機能には相違があり、単にコト性すなわち出来事を表すと述べるだけでは、ノコト名詞句の意味機能のすべてを説明できないと考えられる。

一方、「～こと」節では置き換えられない(3) (4) は、(7) (8) のように「～か／～かどうか」節や「～ように」節でなら置き換えられることが分かる。

- (7) 期末試験を受けるか／かどうか尋ねた。
(8) 会議を開催するように頼んだ。

つまり、これらの例では同じ「こと」という形式を含みながら、「～こと」節とノコト名詞句の意味機能にはずれが生じていると言えよう。

このような(1)と(3) (4)に見られる相違は、それぞれの文における主節の述語の性質に深くかかわる。すでに述べた「議論する」のような述語は、補文になんらかの出来事を導く「～こと」節を要求するが、「尋ねる」という述語は、(7)に示したように補語に疑問文を導く節（以下、「～か」節・「～かどうか」節と呼ぶ）をとるのが普通で、単に叙述内容を表すだけの平叙文は補語にとることができない。さらに、「頼む」という述語は(8)に示されている「～ように」節（以下、「～ように」節と呼ぶ）だと自然である。

しかし、主節の述語の意味だけで、(1)と(3) (4)の相違をすべて説明することはできない。なぜなら、「尋ねる」のように疑問文を導く述語は、(7)のように補文をとる場合は「こと」と共起しないのに、(3)のように名詞句をとる場合は、「こと」を必要とする。つまり、なぜ同じ述語「尋ねる」が同じ形式「こと」に続くのに、補文を導く場合と名詞句を導く場合で選択の相違が生じるのかが説明されていない。

一般に述語が補文を選択する場合、述語はそれ自身の意味に応じて適切な補文のタイプを選択すると考えられている²⁾。そして補文は、「こと」「の」「か」等の文末要素（補文標識）に応じて、固有の意味を持った補文タイプに分れるとされる³⁾。述語によっては複数のタイプの補文を選択し、その場合の意味は補文のタイプによって決まる。例えば、「知る」は(9)のように「～こと」節も「～か／～かどうか」節もとりうる。

- (9) a. 太陽が東から昇ることを知っている。
b. 誰が来たか知っている。
c. 先生が到着されたかどうか知っている。

同じ述語「知る」に対して、「～こと」節が続けば事実について知っているという意味になり、「～か」節が続けば疑問に対する答えを知っているという意味になる。また、「～かどうか」節が続けば出来事の成立の可否を知っているという意味になる。つまり補文標識が、これらの意味の違いを表している。

一方、名詞句の場合、同じ「こと」を補うことで、(1c)のように事実について議論したという意味にも、(3)のように質問を尋ねたという意味にもなる。ここには、補文を導く「こと」と名詞句を導く「こと」との意味

範囲の相違がかかわっていると考えられる。

以上のように、ノコト名詞句は常に「こと」が導く補文と対応するのではなく、「～か／～かどうか」や「～ように」等が導く補文とも対応する。そして、どのような補文と対応するかは主節の述語の特性と深く関わっている。故に、ノコト名詞句の有する意味機能の範囲を明らかにするためには、異なる述語が要求する補文タイプと比較して検討する必要がある。

以下、本稿の構成は次のとおりである。第2節では、先行研究の分析を踏まえた上で、「～こと」節と置き換えられる場合のノコト名詞句の意味機能について述べる。第3節と第4節では、ノコト名詞句の意味が「～こと」節のみではなく、間接疑問を表す「～か／～かどうか」節と「～ように」節とも対応することを指摘し、第5節でこれらの観察を総合し、ノコト名詞句の意味範囲をより明確にすることを旨とする。最後に第6節で全体をまとめ、今後の課題を述べる。

2. 「～こと」節との置き換えが可能なノコト名詞句の意味

すでに述べたように、名詞に「～のこと」の付加が義務的に要求される現象について、寺村（1968）は、コト性を持たない名詞のコト性名詞化とみなした。この寺村の説は、コトを表すような性質（コト性）を持つ「その事件」「ベトナム問題」等の名詞は、名詞が「～を考える（その他認識・思考を表す動詞）」のような枠にそのまま入ることができるが、「あなた」「著書」「彼」のような名詞には「～のこと」を補うことでコト性を形成することができるという観察を踏まえて提案されたものである。

- (10) a. その事件／ベトナム問題を考える。
 b. *あなた／あなたのことを考える。
 c. *著書／著書のことを忘れる。

このコト性を持つ名詞には「発言、主張、思考、認識」といった、発言認識の動詞とつながる共通の意味があり、英語のいわゆる「同格構文」を連想させると述べられている。また、寺村（1980, 1993）において、内容節（同格節）とその主名詞との関係を論じる中で「事実、可能性」のようにその内容を文の形で表すことができるもので、叙述内容、つまり話者の主観的態度の表現が入り込むことの少ない一群の名詞（「事」「事実」「事件」「過程」「可能性」等）を「コトを表す名詞（コトの名詞）」と呼んでいる。

以上のような寺村の研究（1968, 1980, 1993）は、連

体修飾のシンタクスと意味をめぐる一連の研究のなかで「こと」の意味を論じたものであり⁴⁾、直接ノコト名詞句の意味を論じた研究ではないが、ノコト名詞句の意味に関しても議論の出発点となる重要な指摘を含んでいる。特に寺村（1980）で述べられているコト名詞の存在を考慮すると、コト性を持たない名詞に「～のこと」を補うという操作は、その名詞に関連する叙述内容を表すコト名詞を形成することだと考えられる。すでに述べた通り、ノコト名詞句は、適切な文脈が与えられれば、「こと」を置き換えることができる。したがって、ノコト名詞句の表すコト性とは、被修飾名詞「こと」の内容を表す連体節（内容節）と同等な意味として解釈することができよう。もう一度、両者が置き換え可能な例として（11）を参照されたい。

- (11) 花子は今学期になってから、ずっと長期欠席している。
 a. 先生たちは花子のことを議論した。
 b. 先生たちは花子が長期欠席していることを議論した。

(11a)における「花子のこと」は、寺村流に言えば、「議論する」という述語がコト性を持つ補語を要求するという性質から、コト性を持たない名詞である「花子」に「～のこと」を補って、花子に関連する叙述内容を表すコト名詞を形成したものである。そこでこの場合のノコトの意味は、「花子」に対して、(11b)のような「こと」を主名詞とする内容節に相当する意味を補うものであると考えられる。

一方、ノコト名詞句の意味機能を、名詞句の意味論の観点から直接追求する試みもある。笹栗（1999）、笹栗・金城・田窪（1999）、Takubo（2007）は、ノコト名詞句を論じた数少ない先行研究であるが、ここでは、ノコト名詞句は名詞の指示対象の属性（property）の集合であるとされている⁵⁾。

- (12) 太郎は花子のことを話した。

(12)の「花子のこと」は「～は学生である」「～は先週東京に行った」「山田が～を嫌っている」等、「～」の部分に花子が入ると真になるような開放文⁶⁾の集合に相当する意味を持つと述べられている。

「～こと」節と置き換えられる場合のノコト名詞句は、名詞に関連する属性の集合という考え方と組み合わせると、(13)のように「～こと」節の集合として表すことが可能であろう。

(13) 太郎は 花子のこと を話した。

〔 花子が学生であること
花子が先週東京に行ったこと
... 〕

以上のことから、「～こと」節と置き換えられるノコト名詞句の意味は、「～のこと」という表現の「～」の部分に現れる名詞に関連する内容が叙述された「～こと」節の集合に相当するといえる。ノコト名詞句と「～こと」節では、同じ形式名詞「こと」が使用されている。その上、ノコト名詞句は全体として「～こと」節に相当する意味内容を表すのだから、両者の「こと」は同じ意味機能を持っているように考えられる。

しかし、「はじめに」で指摘したように、まずノコト名詞句は、通常「～こと」節をとらない述語とともに使用することができる。さらに、「～こと」節のすべてがノコト名詞句と置き換えられるわけでもない。例えば、「驚く」「気づく」のような述語は、以下の例に示したようにノコト名詞句を補語にとることができない。

(14) a. 雨が激しく降ってきたことに驚いた。

b. ??雨のことに驚いた。

(15) a. 花子が欠席していることに気づいた。

b. ??花子のことに気づいた。

このような点から「～こと」節とノコト名詞句は重なる意味領域を持つと共に、それぞれの独自の意味範囲を持っていることが窺える。両者の意味はどの部分が重なり、どの部分が異なるのか、同じ形式名詞「こと」を使用しながら、なぜ両者にはこのような差異が生じるのか、検討する必要がある。本論考では特に、「はじめに」で述べたようなノコト名詞句が使用できるが、「～こと」節が使用できない場合に焦点をあて、(14)(15)のように、「～こと」節がノコト名詞句と置き換えられない場合については別稿に譲ることにする。

3. 「～か／～かどうか」節との置き換えが可能なノコト名詞句の意味

補文をとる述語の間には、(16)(17)に見られるように、許容する補文のタイプに違いが認められる。

(16) a. 太郎は花子の点数が100点であることを話した。

b. 太郎は花子の点数が何点であるかを話した。

(17) a. ??太郎は花子の点数が100点であることを尋ねた。

b. 太郎は花子の点数が何点であるかを尋ねた。

(16) からわかるように「話す」は補文として「～こと」節も「～か」節もとることが可能である。これに対して(17) からわかるように、「尋ねる」は、補文として「～こと」節をとらず、「～か」節をとらなければならない。(16) のようなタイプの補文をとる述語類には「話す、述べる、論じる、書く」等があり、(17) のようなタイプの補文をとる述語類には「尋ねる、調べ⁷⁾、質問する、調査する」等がある。

すでに述べた通り、主節の述語は補語にとる補文のタイプを選択するが、補文が表す意味は完全に述語によって決定されるものではなくて、補文自体が持つ独自のものである。例えば、「～こと」節は平叙文を導いて断定の意味を持ち、「～か」節は疑問文を導いて疑問の意味を持つが、このような基本的な性格は、述語によって変化することはない。つまり、述語の性質とは別に補文の方にもそれぞれが持つ意味があって、従属節の意味と述語の要求する意味と合致する場合に、補文になることができると考えられる。(16)(17)のように、従属節のタイプとして断定を表す「～こと」節をとるか疑問を表す「～か」節をとるかは述語の性質によって決まるが、断定や疑問のような意味は従属節自体が持つ性質である。補文としてとる従属節のタイプと述語は互いに制限し合う関係にあるといえる。

ところで、ここで興味深いのは、(16)(17) から見られるように、述語によってその述語のとる補文のタイプはそれぞれ異なるものの、どちらも補文をノコト名詞句と置き換えられるという事実である。

(18) 太郎は*花子／花子のことを話した。

(19) 太郎は*花子／花子のことを尋ねた。

すでに見てきた通り、「話す」のような述語は、断定を表す「～こと」節を補文として要求する。そして(18)のように、名詞句を補語としてとる場合も、形式名詞「こと」を挿入することが必要とされる。この場合の「こと」は、寺村の言うように、名詞を「～こと」節と同等の意味に変える機能を持っていると考えられる。ところが(19)においても、「こと」を挿入することが必要とされるのはなぜだろうか。この場合、「尋ねる」のような述語は「～こと」節をとらないので、この時の「こと」の機能を(18)と同等であるとみなすことはできない。つまりノコト名詞句における「こと」は、補文とともに使用される「こと」とは違って、「～か」節の領域までカバーするより広い働きを持っていることが窺える。

以上のことから、ノコト名詞句の意味機能の範囲は、「～こと」節に対応する場合に加えて「～か」節に相

当する場合にまで及ぶことがわかる。「～こと」節の集合に相当する意味を表すノコト名詞句は、「～こと」節が「～する／した」という平叙文を導くことから、「既成の事態を表す平叙文の集合」であるということができると思われる。では、「～か」節に相当するノコト名詞句はどのような意味機能をもつものと考えられるのであろうか。以下では、名詞句が「～か」節に対応する意味機能を有する場合についての指摘がみられる西山(2003)での論に基づいて考えてみたい。

西山(2003)は、日本語名詞句の意味機能について意味論的観点から分析した研究である。西山によれば、名詞句の意味機能は指示性という観点から、大きく「指示的名詞句」と「非指示的名詞句」に区分される。後者の場合は、述語の意味論的性質によって統語的には名詞句でありながら、意味的には疑問文の解釈を受けると指摘されている。

- (20) a. 太郎は、次郎に、洋子の好きな作曲家を紹介した。(西山2003: 59)
 b. 太郎は、次郎に、洋子の好きな作曲家を教えた。(西山2003: 60)

(20a) では、「洋子の好きな作曲家」はある特定の個体を指している。仮に洋子の一番好きな作曲家がショパンであったとしたら、(20a) は「太郎は、次郎に、ショパンを紹介した」という文と同義であり、故に下線部は特定の個体を指していると考えられる。これに対して(20b)の下線部は「洋子の好きな作曲家は誰であるか」という疑問文に対する答え」を意味している。(20a, b)に見られるように、述語との関係によって同一の名詞句が指示的であったり非指示的であったりすることが指摘され、文中での名詞句の意味機能を決めるには述語との関係が重要な手がかりとなっていることが示唆された。

西山(2003)はさらに、このような名詞句は「意味的には項の位置に入る値を問う wh- 疑問文である」と述べ、意味論的には(21)のように変項 x を含む命題に対して、それを満たす値を求める表現として解釈されると論じている。

- (21) 太郎は、次郎に、[x が洋子の好きな作曲家である] を満たす x の値を教えた。

西山(2003)では、(21)のように[x が洋子の好きな作曲家である] という命題関数を表示している名詞句を「変項名詞句」と呼んでいる。そして(20b)において、下線部にこのような変項名詞句としての解釈

を促すのは、「教える」という述語が意味的な選択制限として間接疑問文を要求するからであるとする。

すでに例文(17)と(19)に示したように、補語に疑問節もノコト名詞句もとることができる「尋ねる」のような述語は、西山(2003)が補語に間接疑問文を要求するため、補語の名詞句は変項名詞句としての意味機能を果たすと述べたものである。よって、これらの述語が補語にノコト名詞句を要求するのは、このような意味論的要求を満たすためだと考えられる。

では、「～か」節に対応するノコト名詞句の意味機能も、西山(2003)の変項名詞句として捉えられるだろうか。以下では、西山(2003)による「変項名詞句」というアイデアを、前節で紹介した笹栗・金城・田窪(1999)、Takubo(2007)の「属性の集合」という提案と組み合わせて、「～か」節に対応するノコト名詞句の意味機能を考えてみたい。

次の(22)のノコト名詞句は名詞の指示対象が有する「属性の集合」だと捉えると、(23)のような属性の集合がリストアップされる。

- (22) 健二は太郎に、広島大学のことを尋ねた。
 (23) 健二は $\left\{ \begin{array}{l} \text{広島大学の所在地} \\ \text{広島大学の評価} \\ \text{広島大学の} \dots \end{array} \right\}$ を尋ねた。

つまり「広島大学のこと」というとき、広島大学に関連した属性として「所在地、評価、学生数」等が思い浮かべられる。西山(2003)にならって属性の集合というノコト名詞句の意味を、命題関数を満たす値であると考えるなら、(24)のように表現できる。

- (24) 健二は $\left\{ \begin{array}{l} x \text{ が広島大学の所在地である} \\ x \text{ が広島大学の評価である} \\ \dots \end{array} \right\}$ を満たす x の値を尋ねた。

さらに、このような意味を持つノコト名詞句は、補語に間接疑問文を要求する述語の性質によって、「～か」節に変換され、(25)のような「～か」節の集合になるわけである。

- (25) 健二は $\left\{ \begin{array}{l} \text{広島大学の所在地はどこであるか} \\ \text{広島大学の評価は何であるか} \\ \text{広島大学の} \dots \text{は} \dots \text{であるか} \end{array} \right\}$ を尋ねた。

以上から、「尋ねる」の補文である「～か」節に対

応するノコト名詞句は西山(2003)のいう変項名詞句と同様の意味機能を持っているということができよう。本稿では、このようなノコト名詞句を、「～か」節のなかに wh- 疑問詞が含まれていることから「wh- 疑問文の集合」と呼ぶことにする。

一方、述語が補語に選択する疑問文には、上記で述べた wh- 疑問詞を含む「～か」節のほか、「～かどうか」節もある。

- (26) a. 太郎は花子の点数が100点であるかどうか確かめた。
 b. 太郎は花子が試験を受けるかどうか確認した。

(26) から見られるように「～かどうか」節は、「～か」節とは異なり、補文のなかに wh- 疑問詞が含まれていない⁸⁾。それは「～かどうか」は命題の真偽が不確定的な疑問文であるため、このような疑問文は通常、選択疑問文 (alternative question) と呼ばれるものだからである。ここで重要なのは、「～かどうか」節もノコト名詞句との置き換えが可能であるという事実である。(26) の「～かどうか」節はいずれも (27) に示したように「花子のこと」というノコト名詞句に置き換えることができる。

- (27) 太郎は花子のことを確かめた／確認した。

では、間接疑問文の一種である「～かどうか」節と交替できるノコト名詞句はどのような意味機能を持つのであろうか。まず、(27) における「花子のこと」は (28) のような花子に関連する属性の集合つまり点数や身分等を表す。

- (28) 太郎は $\left(\begin{array}{l} \text{花子の点数} \\ \text{花子の身分} \\ \text{花子の…} \end{array} \right)$ を確かめた／確認した。

この属性の集合を、述語「確かめる」「確認する」が補語にとる「～かどうか」節に対応させると、(29) のような選択疑問文の集合に置き換えることができる。

- (29) 太郎は $\left(\begin{array}{l} \text{花子の点数が100点であるかどうか} \\ \text{花子の身分が学生であるかどうか} \\ \text{花子の…が…であるかどうか} \end{array} \right)$ を確かめた／確認した。

(29) の「～かどうか」節の意味は、「～かどうか」が導く命題の真偽の不確定性や、命題の選択の不確定性

を表すということから、(29) に示したそれぞれの選択疑問文に対して「集合」という考え方を適用することで捉えられる。例えば、(29) の「花子の点数が100点であるかどうか」の意味は、(30) のような集合と捉えることができる。

- (30) 太郎は $\left(\begin{array}{l} \text{花子の点数が100点であるか} \\ \text{花子の点数が100点ではないか} \\ \text{花子の点数が80点であるか} \\ \dots \end{array} \right)$ を確かめた／確認した。

「確かめる」「認める」等の述語に要求されるノコト名詞句が表す属性の集合は、「～かどうか」節の集合に対応させることによって具体化される。「～かどうか」節が選択疑問文を表すという特性とノコト名詞句の表す「集合」という考えを組み合わせると、ノコト名詞句の意味機能は「選択疑問文の集合」を成すものであると考えられる。

以上のことをまとめると、補語に間接疑問文を選択する述語と共起するノコト名詞句の意味機能には、「wh- 疑問文の集合」と「選択疑問文の集合」の二種類がある。前者は「～か」節が導く wh- 疑問文と対応するものであり、後者は「～かどうか」節が導く選択疑問文と対応するものである。このような区分は、主節の述語の意味的性質とも深く関わっている。「尋ねる」類（「質問する、調べる、調査する」等）は補語にとる間接疑問文のなかに wh- 疑問詞を持ち得るものである。これに比べて、「確かめる」類（「確認する、判断する」等）は、wh- 疑問文と結び付けることは難しいが、不確定性を有する補文を要求するために疑問節を形成することができるといえよう。「尋ねる」類も「確かめる」類も同様にノコト名詞句を補語にとるが、述語としての性質の相違から、補文にとる疑問節のタイプは異なっている。従って、両者がとるノコト名詞句の意味機能にも相違が見られる。

4. 「～ように」節との置き換えが可能なノコト名詞句の意味

第2節と第3節では、「～こと」節や「～か／～かどうか」節と置き換えられるノコト名詞句がどのような意味機能を果たすものなのかについて考察を行った。それに加えて本節では、「～ように」節と置き換えられるノコト名詞句について述べることにする。

次の (31) (32) に見られるように、「祈る」「頼む」がとる補文である「～ように」節は、ノコト名詞句と

も置き換えが可能である。

- (31) a. 娘が元気になるように祈った。
 b. 娘のことを祈った。
 (32) a. 議長は会議を開催するように頼んだ。
 b. 議長は会議のことを頼んだ。

では、「～ように」節に対応するノコト名詞句はどのような意味機能を表すのであろうか。この問題を解決するためには、まず、「～ように」節の表す意味用法を把握する必要があるであろう。「～ように」節の意味機能を論じた研究としては、引用句を導く「～と」節や目的節を表す「～ために」との比較を通して「～ように」節の意味用法を論じた前田(1993, 1995)が挙げられる。前田(1993, 1995)では、「～ように」の導く発話内容は時間的に後から発生する事態であるため、命令や祈願等発話時点で未実現の事態に限定されると述べられている。例えば、(31)(32)の例で説明すると、「娘が元気になる」ことは「祈る」という主節の事態に時間的に後行して起こる事態であり、また「会議を開催する」ことも「頼む」という動作の後で発生する事態である。

このような「～ように」節の意味用法は、主節の述語の意味的性質とも密接な関連がある。つまり「頼む、祈る」のような依頼、願望を意味する述語と未実現の事態を表す「～ように」節は共起関係にあるということである。

前田(1993, 1995)の指摘した「～ように」節の意味とノコト名詞句の表す属性の集合とを組み合わせると、「～ように」節と置き換えられるノコト名詞句は「未実現の事態の叙述を表す文の集合」とみなすことができる。

- (33) a. 娘のことを祈った。
 b.

}	娘が元気になるように 娘が試験に合格するように 娘が…	祈った。
---	-----------------------------------	------

 (34) a. 議長は会議のことを頼んだ。
 b.

}	会議を開催するように 会議を予定通りに終了するように 会議を延期するように 会議を …	頼んだ。
---	--	------

(33a)(34a)におけるノコト名詞句は、(33b)(34b)に示した「～ように」節に対応し、いずれも「祈る」「頼む」の動作の後で発生することが期待される事態を表

している。ノコト名詞句が「～ように」節の集合と対応していることから、「未実現の事態の集合」とみなして良いであろう。「～ように」節が導く文のタイプが平叙文であることから、これは「未実現の事態を表す平叙文の集合」ということができよう。これは、同じ平叙文を導く「～こと」節と対応するノコト名詞句が、「既成の事態を表す平叙文の集合」と捉えられることと対比される。

5. ノコト名詞句の意味範囲

以上のような、述語が要求する補文との比較を通して、ノコト名詞句の使用範囲は「～こと」節以外にも、「～か／～かどうか」節、「～ように」節によって導かれる補文の使用範囲をカバーすることがわかった。そして、それぞれの補文タイプの性質の検討を通して、ノコト名詞句の意味機能を導き出すことができた。このような「～こと」節とノコト名詞句の使用範囲の相違を、本節では益岡の一連の研究(1991, 1997, 2000, 2007)において主張された文の意味を命題とモダリティに分離して捉える立場から説明することを試みたい。

まず前節までの議論をまとめると、平叙文を導く「～こと」節や「～ように」節と対応するノコト名詞句は「平叙文の集合」という点で一致するが、補文の表す意味的性質によって前者は「既成の事態」を表し、後者は「未実現の事態」を表すという相違がみられる。また、間接疑問文を導く補文のうち「～か」節と対応するノコト名詞句は「wh-疑問文の集合」であり、「～かどうか」節と対応する場合は「選択疑問文の集合」であるが、両者ともに「命題の真偽の不確定性」を表すという点で一致する。これらの相違点はすべて、「～こと」節やノコト名詞句が表そうとする事態そのものではなく、その事態が「既成のもの」であるか、「未実現のもの」であるかの相違や、命題の真偽が確定しているか、不確定であるかといった話者による事態の捉え方に関連する要素に帰着する。

益岡は一連の研究(1991, 1997, 2000, 2007)において、文は意味的な観点から表現主体から独立した客観的な事態を表す部分と、表現主体の表現時における心的態度を表す部分からなると認め、前者を「命題」と呼び、後者を「モダリティ」と呼んだ⁹⁾。例えば、以下の例文のうち、「昨夜激しく雪が降った」が命題の領域であり、「ねえ、どうやら～ようだよ」がモダリティの領域であるということである。

- (35) [ねえ、どうやら [昨夜激しく雪が降った] ようだよ]。(益岡2007: 16)

益岡はさらに、表現主体から独立して客観的な事態を表す「命題」の領域に、どのような要素が含まれるかを認定するために、「客観的な事態」を表す形式「こと」が基準となると述べている。「こと」という名詞を内容補充する連体修飾節に入り得る要素を命題内要素とみなし、入りにくい要素はモダリティに属するものと認めた。述語の部分では動詞や形容詞以外に、アスペクトを表す「～ている」、みとめ方（肯定・否定）を表す「～ない」、テンスを表す「～た」、ヴォイスを表す「～られる」「～させる」は「こと」の修飾部に現われ得るものであり、命題内要素であるとする。次の例では、これらの要素が「～こと」の内部に現れている。

(36) 勉強させていなかったこと (益岡2000: 190)

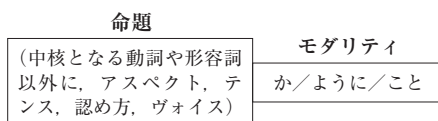
一方、真偽判断（ダロウ等）、価値判断（ベキダ等）、説明（ノダ等）、表現類型（命令表現等）、ていねいさ（デス、マス）、伝達態度（ネ等）の6種類の要素は「～こと」の内部に現れにくく、モダリティに属する要素であるという。つまり、益岡の観点では、「～こと」節の内部にはモダリティ性が含まれておらず、「～こと」節の意味は客観的な事態を表す。

それでは、モダリティが含まれない客観的な事態を表す内容節に「こと」が加わった「～こと」節全体は、どのような意味を持つのであろうか。久野(1973)は、「～こと」節には命題が真であるという話者の判断が働いていると考えた。すなわち、「こと」が加わることによって、モダリティが表現されるという立場である。一方、益岡(2007等)は、「～こと」節自体にはモダリティ性を認定しない。久野が指摘するような「真であるという前提」は、命題が抽象化されることから語用論的に導きだされると考える立場をとる。しかし本論考でみてきたように、ノコト名詞句は「～こと」節がカバーする意味内容に加えて、「～ように」節や「～か」節が表す意味内容も表現することができる。これらの節は、益岡がモダリティの要素と認めた事態の「既成／未実現」「真偽の確定／不確定」のようなモダリティの領域の内容を含んでいる。だとすれば、ノコト名詞句の意味範囲は事態そのものに加えて、これらのモダリティ性の一部にも及ぶということができただろう。

従属節の事態が表すモダリティ性は具体的には以下のようなものである。

「～こと」節と「～か」節と「～ように」節は、いずれも命題要素である動詞とアスペクト、テンス¹⁰⁾、認め方、ヴォイス等が続く。

(37) 従属節における命題とモダリティの関係



まず、「～こと」節と「～ように」節について説明する。命題が「～こと」節に導かれる場合は、従属節の文が表す事態が真であると確定するという話者の断定を下したものである。そして「～ように」節に導かれる場合は、従属節の文が未実現の事態に対する話者の願望を表すことになる。このように、「～こと」節や「～ように」節に導かれる従属節の事態はそれぞれ「既成」「未実現」という点で相違がみられる。

一方、「～か」節のモダリティ性は次のように述べるができる。疑問を表す助詞「か」を伴い、疑問節を成している「～か／～かどうか」節は、従属節の表現主体において真偽の判断が下せない「不定判断」を表す。これは、事態に対する真偽の判断を確かなものであるとする「～こと」節の場合と対立している。

以上、三つのタイプの従属節は既成の事態に対する「断定」や未実現の事態に対する「願望」、「真偽の確定／不確定」という従属節自体の意味を表すとまとめることができる。故に、本論考では、ノコト名詞句は3つのタイプの従属節と同等な意味として対応するという点から、ノコト名詞句を、従属節が帯びているモダリティ性を含む表現としてみなすことができると考える。ただし、すでに述べた通り、「～こと」節にモダリティを認めるかどうかに関しては、研究者の間で見解が分かれている。本稿では、「～こと」節にモダリティ性が含まれると認めたが、従来の研究での異見を踏まえて、ノコト名詞句が含むモダリティ性の詳細についてはより綿密な考察が必要であると考えられる。今後「～こと」節を含め、「～か」節や「～ように」節に関するモダリティ性については更なる考察を行いたい。

以上、ノコト名詞句は三つの従属節のタイプがもつモダリティ性を含む表現であると言える。また、ノコト名詞句とコト節は、どちらも形式名詞「こと」を含む表現であるが、両者の間には、このようにカバーすることができる意味範囲の相違が認められる。

6. おわりに

本論考は、ノコト名詞句と述語が選択する補文のタイプとの対応関係を比較検討することによって、ノコト名詞句の意味機能の範囲をより明確にすることを目

的としたものである。検討の出発点として、寺村(1968)の分析を取り上げ、コト性を表すノコト名詞句の全体の意味は、「～のこと」という表現の「～」の部分に現れる名詞に対応する叙述内容を表すという点で「～こと」節と重なることを指摘した。従来の研究では、ノコト名詞句の意味を探るに当たり、「～こと」節以外に対応する従属節のタイプについてほとんど指摘されていない。従属節の意味的特徴を踏まえてノコト名詞句の意味を検討することによって、ノコト名詞句の意味の詳細を異なる角度から明らかにすることを目指した。本論考の考察により、明らかになったことをまとめると次のとおりである。

第一に、ノコト名詞句は補文として「～こと」節をとる述語以外にも、「～か／～かどうか」節や「～ように」節を要求する述語の補部にも現れることを指摘した。これらの述語も、「花子」のような指示的な名詞は、そのままでは補部として現れることができず、「～のこと」の挿入が義務的に要求される。そこで、ノコト名詞句の意味範囲は先行研究で言われてきたように「～こと」節に対応するものより、広い範囲に及ぶと言える。

第二に、このようなノコト名詞句に対応する従属節の間の意味的相違を検討した。「～こと」節と「～ように」節はそれぞれ「既成の事態」、「未実現の事態」を表す。そして、「～か／～かどうか」節は疑問の形で事態に対する「不確定性」という性質を表す。「こと」節、「～か／～かどうか」節、「～ように」節のような従属節のタイプは主節の述語によって選択されるものであるが、従属節の「断定」「疑問」のような性質は従属節自体が持っている独自のものと見なされる。

第三に、文の意味を命題とモダリティに二分する益岡(1991, 1997, 2000, 2007)の一連の研究に基づいて、ノコト名詞句と「～こと」節の意味範囲の相違を捉えることを試みた。三つの従属節のタイプ(「～こと」節・「～ように」節・「～か／～かどうか」節)には、従属節の表現者の「既成」の事態に対する「断定」や「未実現」の事態に対する「願望」や、事態に対する「不定判断」のような表現者の主観的判断が関与している。これらの従属節と同等な意味として対応するノコト名詞句はモダリティ性を含む表現形式であると考えることができる。

以上のような述語の性質や述語が要求する補文と比較することで、ノコト名詞句がどのような意味範囲を表す表現であるかをより明確にすることができたと考えられる。

金・酒井(2009)では、「～こと」節とノコト名詞句との比較分析を通して、「～こと」節の意味に「事態」

「事実」という二側面があることを明らかにすることを試みた。そこでは「～こと」節は「事態」「事実」のどちらも表しうるが、ノコト名詞句では「事実」しか表せないということが主張された。このような結果は、「～こと」節のほうがノコト名詞句より広い意味範囲をカバーする場合があることを示している。一方、今回の考察の結果からは、むしろノコト名詞句に表現できて、「～こと」節には表現できない意味範囲もあることがわかる。つまり両者の意味範囲は、一方が他方を含むという単純なものではなくて、共有する部分を持ちつつ、それぞれが独自の意味範囲を持っていることがわかる。これまでの分析の結果をまとめて、ノコト名詞句という表現の使用範囲を総合的に考察する必要があると思われるが、これは稿を改めて論じることにした。

【注】

- 1) 述語のタイプに応じて、名詞に対する「～のこと」の付加が随意的である場合もあるが、本論考ではこのタイプは考察の対象としない。
 - i) a. 花子／花子のことを愛している。
 - b. あいつ／あいつのことを殴ってやりたい。
- 2) 日本語の補文構造の統語的特徴に関する包括的研究として Nakau (1973), Josephs (1976), 井上 (1976) 等が挙げられる。
- 3) 名詞化補文標識「こと」「の」の固有の意味素性を分析した研究として Josephs (1976) が挙げられる。そこでは「こと」と「の」にはそれぞれ「direct」「indirect」という異なった固有の意味素性があり、これらの分布は主節の述語の意味との関係から説明されうると述べられている。また、疑問節の「か」については、藤田(1983)を挙げることができる。藤田(1983)は、「～か」節と呼応する述語の意味的な類型化を試みた研究である。
- 4) さらに寺村(1981)では、「こと」自体の意味として「もの」との比較を通して「こと」の実質的意義とその形式化を追求するなかで、「こと」の指示対象は「命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表される動作、作用、変化、状態、属性等を一般的に概念として表したの」と述べられている。
- 5) 笹栗らの研究の最大の関心は「～のこと」の付加が義務的な場合の分析を通して得られた結論である。「名詞のこと」が属性の集合であるという考え方を、付加が随意的な場合にも適用して、両者を統一的に説明しようとするのである。
- 6) 開放文 (open sentence) は述語論理学で扱われ

- る用語で、述語の項に当たる要素が一部欠けている文のこと。欠けている項として様々な個体を当てはめることで、いろいろな文を値として与える。例えば、「～は賢い」の「～」に個体「花子」を当てはめることで「花子は賢い」という文を成立させる。
- 7) ただし、「調べる」は「取り調べる」の意味として用いられる場合には、名詞に「～のこと」を付加しない。
- i) 警察官は花子を調べている。
- 8) 「～かどうか」節のなかにはwh-疑問詞が生じない。
- i) a. ??太郎は花子の点数が何点であるかどうか尋ねた。
b. ??太郎は花子が試験をいつ受けるかどうか確かめた。
c. ??太郎は花子が会議に何時に出席するかどうか確認した。
- 9) 文の意味的構成構造に対する「命題」と「モダリティ」という捉え方は、用語は異なっても他の研究においても同様に捉えられる一般的な概念である。例えば、「命題」「モダリティ」はそれぞれ仁田 (1991, 1997) の「言表事態」と「言表態度」に対応している。
- 10) ただし、「～ように」節にはテンスが含まれない。

【引用参考文献】

- 金英周・酒井弘 (2009) 「コトの意味の二側面—コト節とノコト名詞句の比較を中心に—」 関西言語学会第34回大会口頭発表
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店
- 久野暲 (1973) 「「コト」、「ノ」と「ト」」『日本文法研究』 pp.137-142. 大修館書店
- 笹栗淳子 (1999) 「名詞句のモダリティとしてのコト—「Nのコト」と述語の相関から—」『言語学と日本語教育』 pp.161-173. くろしお出版
- 笹栗淳子・金城由美子・田窪行則 (1999) 「心的行為における認識主体と対象との関係」日本認知科学会第16回大会 (<http://www.jcss.gr.jp/iccs99OLP/p3-8/p3-08.htm> に掲載).
- Josephs, Lewis S. (1976) "Complementation", In Masayoshi shibatani, ed. *Syntax and semantics 5, Japanese generative grammar*.
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞句の下位分類」『日本語教育』12号. pp.42-57
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」『日英比較講座 第2巻文法』 pp.223-266. 大修館書店
- 寺村秀夫 (1981) 「「モノ」と「コト」」『真淵和夫博士退官記念国語学論集』 pp.743-763
- 寺村秀夫 (1993) 「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』 pp.261-296. くろしお出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- Takubo Yukinori (2007) "An overt marker for individual sublimation in Japanese", In Frelsvig, B., Shibatani, M., and Smith, J. C., (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, pp.135-151, KuroshioShuppan, Tokyo.
- Nakau, Minoru (1973) "Sententail complementation in Japanese" Tokyo, Kaitakusha.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 藤田保幸 (1983) 「従属句「～か(ドウカ)」の述部に対する関係構成」『日本語学』2月号 pp.76-83. 明治書院
- 前田直子 (1993) 「「目的」を表す従属節「するよう」の意味・用法—様態用法から結果目的用法へ—」『日本語教育』79号. pp.102-113
- 前田直子 (1995) 「トとヨウニー思考・発話の内容を導く表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』 pp.429-437. くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語のモダリティ探求』くろしお出版